

19 日本国特許庁 (JP)

11 特許出願公開

12 公開特許公報 (A)

昭59-222402

13 Int. Cl.⁷
A 01 N 25 18

識別記号
1 0 2

庁内整理番号
6667-111

14 公開 昭和59年(1984)12月14日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 1 頁)

15 防虫剤組成物

徳島市川内町加賀須野463-10
今切寮

16 特 願 昭58-98489
17 出 願 昭58(1983)6月2日

18 発 明 者 平井啓史
徳島市住吉1丁目1番10号

19 発 明 者 藤原功
鳴門市大麻町桧字東山田14-18

20 出 願 人 大塚家具工業株式会社
大阪市東区豊後町10番地

21 発 明 者 浅海伸紀

22 代 理 人 弁理士 三枝英二 外 2 名

明 細 書

発明の名称 防虫剤組成物

特許請求の範囲

① 揮散性防虫剤及びアルコールを有効成分として含有して成る防虫剤組成物。

発明の詳細な説明

本発明は防虫剤組成物に関する。

揮散性防虫剤の有効成分を長期間保持するためには防虫効果を発揮し得る有効最少量の揮散状態を維持させることが好ましい、このために従来から採用されて来た方法は、不揮発性若しくは揮発性の担体に防虫剤を担持させる方法が知られている。また揮散性防虫剤の揮散を抑制する方法としてゲル化剤によりゼリー状とする方法、樹脂性物質に混練して担持させる方法、他の昇華性物質を併用する方法、セロファンや和紙等にて包装する方法等が実用化されている。しかし乍らこの様な方法では十分に満足いく効果を期待出来ない。

揮散性防虫剤を非親水性物質である動物系物質たとえばロウ、ステアリン酸、ラウリン酸、石油系物質たとえば固形パラフィン等と共存させた場合、揮散性防虫剤の保留効果を得ることが出来る。この場合でも長期間の恒常的揮散特性を得ることは極めて困難であり、一般的には初期の揮散量が多く時間の経過と共に揮散量の減少をきたす。

本発明者は上記懸念に注目し、長期間恒常的に安定した揮散特性を発揮し得る防虫剤組成物を開発すべく研究を続けて来た結果、揮散性防虫剤とアルコール類とを併用するときは所期の目的を達成出来ることを見出し、茲に本発明を完成するに至った。即ち本発明は揮散性防虫剤及びアルコールを有効成分として含有して成る防虫剤組成物に係るものである。

本発明に於いて使用される揮散性防虫剤としては昇華性及び蒸散性防虫剤のいずれをも包含し、また防虫剤としては殺虫剤及び防虫剤の両者を含

BEST AVAILABLE COPY

重量部の割合で10gを採り、加熱溶解後冷却し、25℃に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第1表に示す。

第 1 表

(第1表) 樟腦の揮散量(%)

	10日後	20日後	30日後	40日後	50日後
実施例1	26	47	62	73	86
実施例2	36	59	79	94	99
比較例1	59	87	97	99	99
比較例2	21	32	39	42	44

実施例3.

直径50mmのガラス製円筒容器に、イソサフロール9重量部及びポリエチレングリコール(分子量200)1重量部の割合で10gを採り、混合よく攪拌し、25℃に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第2表に示す。

第 2 表

(第2表) イソサフロール揮散量(%)

	30日後	60日後	90日後	120日後	150日後	180日後
実施例3	33	56	78	80	97	99
実施例4	26	48	58	70	82	95
比較例3	71	88	95	98	99	100
比較例4	18	30	35	86	37	38

実施例5.

直径50mmのガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド9重量部、界面活性剤(エマルゲン404)3重量部及びポリエチレングリコール(分子量200)3重量部の割合で15gを採り、これをよく混合攪拌しつつ水16gを加え、全量30gの乳化液とした。これを35℃、78%RHに湿度制御された雰囲気中に放置し、経日的に揮散量を測定した。結果を第3表に示す。

実施例6.

実施例4.

直径50mmのガラス製円筒容器に、イソサフロール9重量部及びポリエチレングリコール(分子量4000)1重量部の割合で10gを採り、加熱溶解後冷却し、25℃に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第2表に示す。

比較例3.

直径50mmのガラス製円筒容器に、イソサフロール9gを採り、25℃に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第2表に示す。

比較例4.

直径50mmのガラス製円筒容器にイソサフロール9重量部及びパラフィンワックス(融点155°F)1重量部の割合で10gを採り、加熱溶解後冷却し、25℃に温度制御された大気中に放置し経日的に揮散量を測定した。結果を第2表に示す。

直径50mmのガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド9重量部、界面活性剤(エマルゲン404)8重量部及びポリプロピレングリコール(分子量700)3重量部の割合で15gを採り、これをよく混合攪拌しつつ水15gを加え、全量を30gの乳化液とした。これを35℃、73%RHに湿度制御された雰囲気中に放置し、経日的に揮散量を測定した。結果を第3表に示す。

比較例5.

直径50mmのガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド9gを採り、これを35℃、73%RHに湿度制御された雰囲気中に放置し、経日的に揮散量を測定した。結果を第3表に示す。

直径50mmのガラス製円筒容器に、N-ジエチルトルアミド3重量部、界面活性剤(エマルゲン404)8重量部及び流動パラフィン8重量部の割合で16gを採り、これをよく混合攪拌しつ

つ水15gを加え、全量30gの乳化液とした。
これを35℃、73%RHに温湿度制御された雰囲気中に設置し、経時的に揮散量を測定した。
結果を第3表に示す。

第 3 表

(第3表) N-ジエチルトルアミドの揮散量(%)

	30日後	60日後	90日後	120日後	150日後	180日後
実施例5	22	39	52	62	72	81
実施例6	13	22	31	38	44	54
比較例5	35	60	75	86	94	98
比較例6	10	15	16	18	18	19

(以上)